特集
牧畜社会における集団観の時空間分析

地域研究 JCAS Review Vol. 20 No.1 2020 1-12

特集にあたって

牧畜社会の集団観研究序説

シンジルト 熊本大学大学院人文社会科学研究部 教授
Shinjilt
E-mail: shinjilt@kumamoto-u.ac.jp

2020 年 3 月 12 日投稿受付／ 2020 年 3 月 30 日採択決定

Abstract

The history of the modern era reveals evidence of non-sedentary peoples, such as pastoralists, being overwhelmed and marginalized by the establishment of nation states with territorial boundaries. As the tide of globalization has accelerated, a conflict has persistently arisen on a global level between minorities at the periphery and nation states at the core. This has led to an awareness of the challenges of discussing ethnic conviviality. The aim of this special issue is to reconsider the lessons that pastoralists can teach modern society such that their group consciousness offers a clue to the way different ethnic groups might be able to co-exist.

The discipline of cultural anthropology, with its focus on research into societies living at the margins, has accumulated a vast amount of data about group consciousness from non-sedentary peoples, such as pastoralists, thus contributing to the development of studies in ethnicity. Those studies, however, have failed to develop their discourses adequately, with regard to historical, political and other factors. Historians, on the other hand, have omitted to contextualize pastoralists' ways of thinking and behaviour or bring them into the mainstream of historical studies, not least because of the shortage of primary sources.

This special issue addresses three themes by adopting an interdisciplinary and comprehensive approach designed to make connections between cultural anthropology and historical studies. Firstly, any account needs to show how pastoralists, who have never recognized the guiding principles of cross-border restrictions necessitated by the nation state, have entered into negotiations with those nation states. Secondly, it is necessary to examine how pastoralists have constructed and maintained their ethnic and cultural identities and ways of life, whilst having been integrated inexorably into the nation-state framework. Finally, a discourse is required on the fundamental theme of how pastoralists have sustained their group consciousness and how their ethical perspectives have lodged themselves in the midst of their encounters with other ethnic groups within the nation states' borders. The implications for what this group consciousness proffers for conviviality will be elucidated.

Keywords non-sedentary peoples, cultural anthropology, historical studies, group consciousness, conviviality

キーワード 非定住民、文化人類学、歴史学、集団観、共生

近代以降、牧畜民などの非定住民たちの社会が周辺化され、定住民を主体とする領域国家によって世界秩序が構築された。だが、グローバル化が進む今日においてさえ、領土をめぐる民族や国家同士の葛藤は後を絶たない。こうした既存の集団をめぐる観念的枠組みの内で、共生を論じるにはどうしても限界を感じるのである。共生を求める現代社会にとって、周辺化されてきた牧畜社会の集団観がいかなる意味をもつかを考えるのが、本特集である。

これまで、周辺社会を主な研究対象としてきた文化人類学は、牧畜民など非定住民たち

の集団観に関する研究を多く蓄積し、エスニシティ研究に貢献した。だが、それらの研究には、歴史的視点の欠如、国家的存在の看過といった問題もあった。他方、オーソドックスな実証主義的歴史学においては、文字資料の少ない牧畜民やその視点は、ほとんど主役にはなりえなかった。

本特集において、われわれは、文化人類学と歴史学の知見を融合させながら、次の3つの問いに答えていく。まず、歴史において、限定された土地という地理空間に囚われない牧畜民たちは、いかに国家に排除し統合され、それらに対して彼らはどのように応答してきたのか。それから、現在、国民国家の枠組みの中で、牧畜民や元牧畜民たちがいかに牧畜民としてのアイデンティティを構築し、どのように自らの生業と暮らしを再構成しようとしているのか。さらに、様々な変化を経験しながら、牧畜民たちは、実際、今、どのように集団を編成し、集団的他者といかに接すべきだと認識しており、そのような集団観が共生の議論にいかなる示唆を与えうるのか。

しかしながら、ここで、そもそも、なんで非定住民なのか、あるいは、なんで牧畜民なのか、といった疑問点が浮かび上がってくるだろう。こうした疑問点を想定しながら、各論に先立ち、本稿では、まず、いわゆる民族に関する文化人類学的な研究成果がいかに非定住民社会の集団観に依拠してきたかについては、リーチの『高地ビルマの政治体系』を中心に整理する。それから、非定住民社会というのは、社会進化の過程で淘汰された結果なのか、それとも定住を拒否した人々の積極的に選択した道なのかについては、スコットの『ゾミア』を中心に検討する。さらに、アカデミックなエスニシティ研究に大きく貢献してきた、非定住民社会とりわけ牧畜社会における集団観に関する研究は、今、どのような状態にあり、どのような可能性を秘めているかを考察しておきたい。

1 非定住民という源泉

社会人類学者リーチは『高地ビルマの政治体系』の冒頭において「これはビルマ北東部に住むカチン族とシャン族についての書」であり、「民族誌的記述を意図したものではない」と自著を位置付ける。民族誌的記述ではないということを強調するのは、従来の機能主義に基づく民族誌が、外部との関係はほとんど遮断された、一つの特定の民族集団について書かれた静態的なものであるのに対して、自ら書いているものはそうではないということを強調したかったためであろう。彼はいう。「カチンを論ずる時にシャンを無視し、シャンを論ずる時にはカチンを無視するというのが、人類学のごくふつうのしきたりになっている。ところがカチンとシャンとは、ほぼどこでもとなりあう隣人であり、日常の暮らしにおいては区別をつけがたい」(リーチ 1987:2-3)。つまり、従来の民族誌的な記述において措定されていた「一文化＝一民族」という社会体系は、リーチが直面した高地ビルマの現実には存在しなかったのである。一つの民族は常に一つの言語文化と重なり合うわけではなく、両者を互換的に用いることはできないというリーチの考えが、民族を関係性の中で動態的に捉えていくエスニシティ論の先駆けになった。

リーチは自らの書を「カチン族とシャン族についての書」だという。しかし、実際に割り

与えられた紙面をみると本書は基本的にカチンのエスニシティに書かれたものであることが分かる。シャンとの関係においてカチンのエスニック・アイデンティティ（民族意識）の特徴を描き出した点に、動態的な研究としての本書の特徴が最も顕著に表れている。動態的なものとして具体的に挙げられたのは、カチンの社会体系とされるグムサ型（貴族的）の首長が、基本的にグムサ型と矛盾するシャンの王侯（シャン型）と同じような地位を得ようとするが、不成功に終わってしまう事例であり、カチンの平民がシャンに対して労働奉仕を行い、その代償としてシャンの女を得ることでシャンになる、といった事例である。総じて、カチンがシャンへ接近する事例であり、シャンからカチンへの接近の事例はない。ないだけではなく、「シャンの平民がカチンに同化してその平民身分に入ることはありそうもない。山は平地の人間にとって何の魅力もないものだから」（リーチ 1987：251）とリーチは洞察する。集団の境界を積極的に越えようとするのがカチンのほうだとすれば、その境界をむしろ必死に保守しようとするのがシャンのほうであろう。

では、集団境界をめぐって両者がもつ観念（集団観）にみられるこうした対照性はどこから生まれたのか。この問いに対するリーチの答えは明晰である。両者の通常の生活様式の間に相違があるからだという答えである。シャンが水稲耕作を営むため、その集落は平地にあり、かつ永久的である。シャンは自分の土地にしばられており、カチンのように、ある地域の首長から別の地域の首長へとたやすく服属の対象を変えることはできない。自分が帰属しているのは自分の生まれた村である。シャンの個人がまずもって帰属するのは、いずれかの土地であって、親族集団ではない（リーチ　1987：242-243）。これは、生業形態の相違が集団観の相違を生み出した、という因果論的な説明である。移動性を特徴とするカチンの集団的アイデンティティのよりどころは人間であるのに対して、定住性を特徴とするシャンの集団的アイデンティティのよりところは土地であった。リーチは人々がもつ集団観の特性を論じる本書において、生業の在り方を方向付けるエコロジカルな要素にも十分留意し、そのために、一つの章を割いている。「カチン社会のエコロジカルな背景」と題する第2章において、リーチは、山地住民が営む移動農耕の特徴は例外的な条件の下でしか余剰が生まれないことにあり、河谷住民が営む定住農耕の特徴は安定した経済基盤にある、といったことを紹介しながら、カチンとシャンの対照性は、まずもってエコロジカルなものであると分析する。そのため、両者がたとえ同じ言語を話したとしても、その文化的な相違は顕著だ、と明察する（Leach 1954: 18-28）。

このように、リーチはカチンとシャンについて「日常の暮らしにおいては区別をつけがたい」と述べながら、実際、両者の相違についての記述のほうが多い。その相違は、観念的なものであったり、その観念的なものを支えるエコロジカルなものであったりする。こうしてみると、彼の動態的なエスニシティ論を支える多くのアイデアは、集団境界の安定性を追求する平地民シャンではなく、集団境界を越えようとする高い越境性をもつ山地民カチンに対する観察経験から直接えられている、と理解するのが自然であろう。カチンの経験において、焼畑という移動農耕やその背景にあるエコロジカルな要素の重要性は看過できない。リーチ自身は、エコロジカルな要素に加えて、政治的環境や人的な要素の影響をより強調したがっているようにみえる。しかしながら、カチンに関する文脈において

いえば、カチンとカチンを取り巻く自然との関係（エコロジカルなもの）が、カチンと他集団との関係（エスニックなもの）を方向付けていることが分かる。この意味で、カチンのような非定住民としての存在は、リーチの動態的なエスニシティ論を生み出すアイデアの源泉であった。

2 ゾミアという概念

リーチの影響を受けながら、リーチの研究を大きく拡張しようとしているのが、スコットである（スコット 2013）。スコットは、リーチが取り上げた高地ビルマを含む東南アジア大陸部全体を「ゾミア」と名付け、ゾミアに住む山地民は遅れた未開人ではなく、むしろ低地定住農耕国家の収奪と支配から脱出した人たちであるという見解を示す。すなわち、ゾミアは避難地域であり、ゾミアで営まれている焼畑や採集といった生業は、社会進化における灌漑稲作の前段階の生業ではなく、国家の攻撃から自らを防御するため故意に取った政治的な判断によるものである、という見解である。焼畑や採集といった生業は、人々が自然環境に適応した結果などではなく、国家から脱出した人々が国家との駆け引きの中で構築されたものであるが、それに加えて、山地に暮らす諸民族（部族）も、国家と対立関係において構築されたものである、というのが、スコットのラディカルな構築主義的解釈である（スコット 2013：260-286）。

通時的に、山地に暮らす諸民族およびその生業のいわば「起源」をめぐるスコットの挑発的な解釈は、直ちに多くの批判を浴びるようになった。例えば、スコットの記述からは当の山地民の実生活がみえてこないのではないか。西洋的な概念でアジアの歴史を分析するのははたして妥当なのか。山地民はほんとうに国家へ反逆の意思をもった無政府主義者だったのか。対立的な図式において山地民と国家の関係を描くのは適切なのか、といった批判が挙げられる（Lieberman 2010; Jonsson 2010; ダニエルス 2014a, b; 片岡 2014）。実証主義を重んじる評者たちにとって、山地民の生業形態さえ山地民が国家との折衝の産物なのだ、というスコットの主張は、奇異に映ったに違いない。そして、「起源」をめぐって、スコットは、リーチの議論を継承しつつも、リーチとは異なり、エスニックな関係がエコロジカルな関係を決定したという主張をしている。

しかしながら、山地と平地の異なる民族集団の特徴に関する具体的な記述において、スコットの議論はいたってリーチの主張に忠実である。一方、スコットは平地民のシャンに関して、リーチの主張を次のように引用する。「シャンの人々は広く分布して暮らし集落が点在しているのに、驚くほど均質である。私が主張したいのは、シャン文化の画一性は、シャンの政治組織が画一的であることと相関関係にあり、この政治組織はシャン特有の経済的特徴によってほぼ決定されている、という点である」。そのうえで、スコットは「シャンであることと水稲耕作をすることは同義語になっていった」と改めて断じる（スコット 2013：255）。これは、生業（経済）の在り方が政治の在り方を、政治の在り方が文化の在り方を決定した、と断言したことになる。つまり、エコロジカルなものがエスニックなものを方向付ける、ということになろう。他方、スコットは移動性を特徴とする山地民たちの

集団的アイデンティティの特徴に言及する際、「穴だらけ、複雑、流動的」といった言葉を用いる。つまり、彼ら山地民のアイデンティティは、聞き手がだれであるかによって明らかに変わる。彼らは複数のアイデンティティをもっていて、状況に応じてアイデンティティを使い分ける。多くの山地民が複数のアイデンティティをレパートリーとしてもっていると仮定すれば、レパートリーの多くを引き出しているのは、その行為の背景にある社会的文脈である、という（スコット 2013: 256-259）。リーチを継承するスコットにとって、カチンとシャンの集団観は完全に相いれない。

リーチの考察を踏まえながら新しい議論を展開しようとするスコットの研究から、再度確認できるのは、定住農耕を営む平地民シャンとの対比においてその集団的な在り方の特徴がより顕著にみえる移動農耕を営む山地民カチンに、焦点を与えたからこそ、民族をめぐるリーチの考察が、「動態的」になった、ということである。逆にいうならば、もし仮に、リーチがクローズアップしたのが、「穴だらけ、複雑、流動的」な集団観をもつカチンなど山地民ではなく、「均質」的で、「画一」的な文化と「静態的」な集団観をもつシャンのような平地民であったとすれば、彼の動態的な民族理論はきっと生まれていなかっただろう。つまり、『高地ビルマの政治体系』におけるリーチの研究は、総じて、平地定住民との対比における山地移動民の集団観に特化した研究であった、というべきであろう。

スコットの議論全体においては、「国家」がひとつの基軸である。「国家」の束縛から解放を求めて生まれたのが山地民だというのが彼らの仮説である。だが、彼がいう「国家」の適応範囲はかなり広い。それには、はるか昔にあった水稲国家、西洋列強による植民国家、近代国民国家などがすべて網羅されている。曖昧ではあるが、彼のいう国家には、共通点がある。それらの国家を作った主体が、すべて定住（農耕）民であるという点では共通している。その意味で、彼のいう「国家」は、ほとんど定住農耕国家と同値であり、場合によっては、定住農耕民社会あるいは定住農耕民そのものに、読み替えられても差し支えない。『ゾミア』におけるスコットの議論も、リーチと同じく、平地定住民との対比における山地移動民の集団観に関する議論だと言い換えてもよいだろう。後の研究で、スコットは、農業の発生と国家の発生は同時ではないことを示しつつ、穀物によって生成された国家の基礎は、定住農業であることを論じている（スコット 2019）。

スコットの貢献は、非定住民社会の在り方を、ゾミアという言葉で、概念化したことにある。彼は書の結論部において自らの研究を次のように位置付ける。「ゾミアや山塊の研究とは、山地民そのものの研究ではなく、国家を避けようとしたり、あるいは国家によって排除されてきた人々についてのグローバルな世界史の一部である」（スコット 2013：333）。そのうえで、彼はさらに「ゾミア地域以外にも国を超えて広がる空間のグローバルな世界史に含まれてくる人々はいるけれども、本書では軽く触れることしかできなかった。ここで本格的に扱うことはできなかったジプシー、コサック、ベルベル、モンゴル、その他の遊牧民なども国家周辺の歴史を広く描き出すうえでは欠かせないだろう」（スコット 2013：334）と展望する。スコットの狙いは、東南アジアという地域の弱者で移動農耕を営む山地民たちに歴史的な主体性を付与することだけにあるわけではない。固定した境界を前提とする「国家」の制度になじまない、移動性を特徴とする民のおかれる窮状を巨視的に描

き出すことにあるように考えられる。実際、スコットのゾミアというアイデアを、内陸アジア牧畜地域の歴史的社会的な文脈に導入し、その有効性をポジティブに評価している社会人類学者もおり（Humphrey 2015）、ゾミアは、東南アジア大陸という地域研究の域を超えて、国家との関係において非定住民の歴史や社会を分析するうえで汎用性の高い概念である。

3 集団観という課題

一つの民族は常に一つの言語文化と重なり合うわけではなく、両者を互換的に用いることができない、というリーチの考えが、民族を社会的相互作用の中で動態的に捉えていく議論の先駆けだったとすれば、アカデミックなエスニシティ研究への影響という点では、いわゆる客観的な文化ではなく、主観的な帰属意識に注目したバルトが出発点になった。バルトの調査研究は多岐にわたるが、民族をめぐる議論は、主にパターンなど西アジア牧畜社会での調査でえられた民族誌的なデータに基づくものである。パターンとは、スコットの記述のなかでも「文明とならず者」、つまり、広義のゾミアの住民の一員として、しばしば登場する「アフガニスタンとパキスタンに居住するパシュトゥーン」のことである。エスニシティ研究に多大な影響を与えたバルトの代表作である1969年の論文（Barth 1969）は、遊牧民パターン人内部における南北の文化差の問題、パターン人と南の隣人バルーチュ人や北の隣人コヒスタン人との相互作用にみられる、パターン人の集団観の特徴を考察したものである。一連の考察を通じて、彼は、民族の文化内容よりも民族間の境界やそれを維持する民族意識の重要性を指摘した。自他ともに承認された帰属意識こそが民族の核心であり、意識の作用する場が民族集団であり、場の存続は境界の維持によって実現されるという。その境界の維持には必ずしも共通の言語、習慣、信仰などの「客観的な」文化的特徴を必要としないと分析した（シンジルト 2017）。

バルトの主観的な境界理論は、汎用性の高いものとして、とりわけ移動を特徴とする都市における移民問題をめぐる諸研究にもよく引用されている。しかし、バルトの境界理論は、例えば、リーチの『高地ビルマの政治体系』やスコットの『ゾミア』に登場するシャン人などのような平地民社会において、おそらく通用しないだろう。リーチもバルトも、社会文化人類学におけるエスニシティ研究のキーパーソンであり、動態的な民族理論の生みの親であることは多くの研究者に認められている。しかし、両者の理論を生み出しているのが、焼畑（採集）や牧畜を営む移動農耕民や牧畜民であることは、必ずしも十分に意識されていない、というべきであろう。バルトが研究対象にしたパターンもリーチが取り上げたカチンと同様に、非定住民であり、移動という点では両民族は共通している。移動性を特徴とする人間集団のあり方が、両氏の動態的な民族理論を培ったものである。両氏の動態的な民族理論は、両民族の集団観の写しともいえよう。

バルトの研究対象である西南アジアはもとより、ユーラシア大陸そしてアフリカ大陸における牧畜地域のすべてが、おそらくスコットにいわせば、「ゾミア」になるだろう。スコットが過度にといっていいほど国家を意識したのに対して、バルトはその境界理論にお

いてむしろ国家の存在をまったく看過していたのである。しかし、周知のように、近代以降、たとえいくら移動性に富んだ牧畜民（遊牧民とされる移動牧畜民も含む）といえども、国家の影響から免れ完全に自由でいられることは、もはやあり得ない。牧畜を遅れた生業とみなしがちな近代国民国家は、牧畜民に対して定住化あるいは農耕民化政策を推し進めてきた。そうしたなかで、同時代の牧畜民あるいは元牧畜民となった人は、どのように自他の境界を措定し、社会実践を展開しているのかが軽視できない課題となる。近年、牧畜研究から出発している人類学者のなかには、エスニシティとエコロジカルの関係の再考を促す声も出始めている。例えば、佐川徹は、民族単位は明確な空間的境界で区分されるべきという国民国家的な発想は「定住民中心的な発想」だと近代の集団観の系譜を農耕民の生業的特徴に求めた（佐川 2009）。松井健は「生業のエートス」という表現をもって特定の生業と特定の観念や倫理の関係を理解しようとする（松井 2011）。しかし、こうした個別的な研究以外、牧畜研究全体において、バルト以降、牧畜社会における集団観に関する本格的な研究はほとんど休止状態にあるといえよう。

他方において、リーチやバルトが基礎づけたエスニシティ研究は、その後、いわゆる焼畑や牧畜といったエコロジカルな文脈から切り離され、一般化されていく。とりわけ、バルトが提示した主観的民族意識の源泉となるものは何かをめぐって登場したのが、「道具論」と「原初論」である。コーエンなどに代表される道具論者たちは、民族を表象する諸要素は、人々の力を動員し、特定の目的遂行のための意図的に操作された道具に過ぎないと主張する（コーエン 1976）。ギアーツなどのような原初論者たちは、人びとは共通の利害によってではなく、血縁や親近感に基づく「原初的紐帯」とも呼ぶべき非合理的な感情によって特定の民族に属する、という（ギアーツ 1987）。バルト以降のエスニシティ研究領域では、民族等は客観的な文化要素に基づくものではなく想像の産物だとする道具論的あるいは構築主義的なアプローチが主流となっている。このアプローチだけでは、言説分析に傾斜するあまり、対象は多様であっても分析結果は一律になり、研究全体が平板化する傾向がある。

こうした構築主義一辺倒の背景には、環境決定論あるいは本質主義への批判回避があっただろうと考える。しかしながら、構築主義が行き過ぎると、社会人文科学全体が、一種の人間中心主義的な袋小路に陥る。人間の主観に基づく語りだけでは人間が生存できない。それと同様に、実存レベルにおいても人間の社会生活の多くは、非人間的な要素との関わりあいにおいてはじめて成り立つ。人間集団と人間集団とのエスニックな関係、人間集団と自然などの非人間とのエコロジカルな関係、この二つの関係は実は相互に影響し、互いを規定しあうのである。こうした互いに規定しあい、反復される運動の中に我々人間が生を受けているとすれば、研究者としては、両関係を常に研究射程に収める必要があるだろう。すなわち、いかに人間中心主義から脱却し、休止状態にある牧畜民の集団観に関する研究をどのように復活させ継承していくかが、我々にとって課題になる。

4 本特集の目標と構成

こうした課題に立ち向かうべく、組まれたのが本特集である。近代以降、牧畜という生業や牧畜民という人たちは周辺化された。周辺化といえば、一般的にイメージされるのは、世界秩序において政治的経済的に周辺化されてきた「第三世界」や「発展途上国」などと呼ばれるアジア・アフリカの国々であろう。だが、看過してならないのは、そうした第三世界や発展途上国のなかにおいてもさらに周辺化されているのが、牧畜という生業およびそのような生業を営む人々である、という事実である。幾重にも周辺化されたからこそ、牧畜に焦点を絞ることで、現代社会の全体像がみえてくる。その意味で、牧畜は、現代社会を映し出す鏡となるだろう。他方、移動性を特徴とする生業の在り方に深く規定され、「穴だらけ、複雑、流動的」なアイデンティティを持つがゆえに牧畜民の集団観は柔軟である。この柔軟な集団観が、固定した集団境界を前提におきながら異なる集団同士の共生を求める現代社会に対して、別の共生の在り方を提示することが期待される。

本特集は、牧畜社会あるいは元牧畜社会の事例を中心に、人間集団同士のエスニックな関係と、人間と自然のエコロジカルな関係とがいかに規定しあっているかを解明しつつ、そこでみられる牧畜民の集団観が具体的にどのように共生概念の拡張に寄与しうるかを考察していくものである。こうした問題を真剣に考えようとする際に、文化人類学だけではなく、歴史学的なアプローチも重要不可欠である。本特集は、方法として、時間と空間の二つの軸を重要視する。そして、文化人類学的なアプローチにおいてしばしば看過されがちな「国家」の存在を十分意識し、特定の国民国家という大きな枠組みのなかで牧畜民の現在を捉えることも試みる。

7本の個別論文から構成される本特集は、具体的には冒頭でも述べた3つの問いに答えていくものである。まず、歴史において牧畜民がいかに国家に排除し統合され、それらに対して彼らはどのように応答したか、という問いに答えるのは地田論文と井上論文である。

「全面的集団化前夜のカザフ人牧畜民（1928年）――『バイ』の排除政策と牧畜民社会」において、地田は、ソヴィエト国家による牧畜民の首長排除という史実を主題化する。1920年代に中央アジアのカザフ草原で起きた干ばつというエコロジカルな危機が大規模な飢餓をもたらし、飢餓から人びとを救済する名目でソ連政府は富裕層であるバイなどの首長たちの財産を没収し、その地位の弱体化を狙った。だが、これは、経済政策というよりもむしろ政治的・社会的な施策だった。カザフ人遊牧民の集団的アイデンティティのよりどころは氏族であり、氏族をまとめるのはこうした首長であり、その集団観の特徴はいわば属人主義的であるが、バイ排除の真の狙いは、属人主義的な集団観を属地主義に改変することにあったからである。

「遊牧から漁撈牧畜へ――定住化政策下のカルムィクについて（18世紀後半～19世紀中葉）」において、井上は、定住化に対する牧畜民の応答を取り上げている。19世紀、南ロシア草原に遊動する遊牧民カルムィクの移動性を制限すべく、帝政ロシア政府は、彼らの移動を行政区分の中に抑え込み、定住化政策を進めた。ロシア帝国の呼びかけに応じて定住化はするものの、カルムィクの牧畜民たちが選んだのは、農耕ではなく漁撈であった。な

ぜなら、ロシア帝国にとって、農耕も漁撈も定住であるが、カルムィク牧畜民の価値においては、漁撈は牧畜、信仰に匹敵する意味をもつ存在であり、また、漁撈で捕られた魚の販売による家畜の購入も可能となるからである。ロシアの定住化を推進する論理とカルムィクの牧畜を守る論理が交錯する事例となる。

つぎに、今現在、国民国家の枠組みの中で、現役の牧畜民あるいは元牧畜民になった人たちがいかに牧畜民としてのアイデンティティを構築し、どのように自らの生業と暮らしを再構成しようとしているのか、という問題に回答するのは田村論文と宮本論文である。

「公共化するユルック── トルコにおける『遊牧民』の連帯をめぐって」において、田村は、西洋化や定住化をいち早く推進してきたトルコ共和国において近年台頭する遊牧民の末裔という意識とそれがもたらすさまざまな社会実践を取り上げる。11世紀に中央アジアからアナトリア半島へ移住してきた遊牧民オグズ族の末裔であるユルックを自称する人々が中核となるもろもろの遊牧民協会が2000年代に入ってからトルコ全国において次々と結成された。遊牧文化の維持を目的とし、実在の氏族名を名乗る協会が、トルコ全国各地で開催する各種のイベントは、ユルック意識を持たない一般国民や政府高官も虜にしながら、ナショナリズム延いては汎テュルク主義高揚の場となる。こうした一連の動きの根底に共通にあるのは、領土というよりは、先祖や氏族をアイデンティティの拠り所とする属人主義的な集団観である。

「ネップ関係からみるブータンの高地牧畜民社会とその変容── 北部国境防衛と定住化の狭間で」において、宮本は、国家と高地牧畜民との駆け引きに着目する。1950年代にブータン政府が国の近代化と国民統合のため牧畜民の定住化を推進したが、それに対して牧畜民は農耕民との間に「ネップ」という相互扶助の関係を結びながら、移動牧畜を堅持し、国家による包摂と階層化に抗してきた。他方、2010年代になり、国境問題で中国との緊張が高まると政府は国防のため牧畜民を高地に引き留めるべく、定住化を否定するかのように牧畜の継続を勧める政策に転じた。こうした政策に翻弄されながら、高地牧畜民たちは、いかに生業や暮らしを維持し、アイデンティティを確立するかという課題に直面する。

さらに、さまざまな変化を経験しながら、牧畜民たちは、実際、どのように集団を編成し、集団的他者といかに接すべきだと認識しており、その集団観が共生の議論にいかなる示唆を与えるのか、という問い掛けに応じているのは、シンジルト・上村・波佐間による3つの「在地の共生論理」(風間 2016) に関する民族誌である。

「ニェディの民族誌 ── チベット牧畜社会における集団観の動態」において、シンジルトは、ある社会現象から牧畜民の集団観の今を読み解こうとする。定住化政策の結果、チベット高原に暮らす牧畜民の間でニェディという親族の集まりを開催することが流行り始めた。ニェディはモンゴル族とチベット族といった公定民族の境界も越えて広がる。老若男女を問わず、親族という意味でニェリンと呼ばれる参加者たちは、多い場合千人を超え、数百キロの旅をして一か所に集まり、イベントを行い、SNSを駆使しながらネットワークを構築したり系譜を編纂したりする。この点で親族は民族を超えたといえるが、しかし、ニェリンは親族とは似て非なるものである。なぜならニェリンは先祖基点の血族も自己基点の姻族も含みながら、そのいずれも凌駕する包括的な概念だからである。必ずしも民族

の下位カテゴリーではないニェリンが民族の境界を横断する意味で、ニェディは民族共生の場になる。現象としてニェディは斬新だが、その根源にある、人は特定の人物のもとで集合する、という属人主義的な集団観は、在来のものである。

「家畜は境界を越える――モンゴル国西部におけるエスニック集団の共生原理」において、上村は、モンゴル国西部に暮らす言語と宗教を異にする牧畜集団カザフ人とオリアンハイ人との集団の間にみられる共生関係の原理を民族誌的に探究する。両集団は、婚姻や儀礼などエスニックな面において互いに排他的であるが、牧畜というエコロジカルな面においては協力的である。とりわけ、家畜預託などの協力関係においては、ターマルと呼ばれる友人関係がある。ターマルは家畜預託の契約に人格的な意味を持たせるのであるが、しかし、人々はターマルとはどうあるべきかについては語らない。ターマルの規範は、乞われたら助力を惜しまないという倫理のみにより構成され、具体的な行動は常に参照されるが、「型」としては経典化されていない。ターマル関係は、家畜が境界を越えることを契機として結ばれる。しかし、エスニック境界は変化せず安定である。ターマル関係は、いわば離接的総合であり、統合による同化や隔離と領土化を伴う地域自治とも異なる共生の原理を示している。

「敵の命を助ける――東アフリカ牧畜民の共生論理」において、波佐間は、牧畜民的な個人と集団の関係を考察する。東アフリカでは、レイディングと呼ばれる牧畜民同士で相手の家畜を略奪しあい、殺人を伴う紛争が頻発し、こうした紛争における死は、集団的アイデンティティの生成を促す。他方、紛争において敵対側メンバーの命を助ける助命現象もよくみられる。助ける側は特定の倫理規範に従っているわけではなく、助けられる側も命乞いしているわけでもない。その場限りで生じた個人同士の何らかの共鳴に基づく仲間感覚によって助命が成立する。このような個人の優越性は、集団への個人の出入りが自由であるという側面にもみられるが、この自由は集団が特定の牧草地を独占できず、個人も常に移住先で新たな仲間を受け入れる必要があるというエコロジカルな制約に起因している。個人が集団に隷属するというより、むしろ逆である。助命の現場でみられるのは、領土ではなく、先祖でもなく、氏族でもない、今ここにいる個人を核とする究極な属人主義的な集団観である。紛争というネガティブな出来事における助命というポジティブな現象から共生の可能性が読み取れるのであれば、それは領土に帰属意識の基盤をおきながら均質的な個人を包摂する集団と集団の共存とは相いれない共生である。

このように個別論文において、時空軸で牧畜社会における集団観が分析され、そこに含まれる在地の共生論理が民族誌的に検討されている。帝政ロシアやソ連政府と移動牧畜民のカルムィクやカザフとの駆け引きの歴史をみると、領土国家にとって、移動というエコロジカルなニーズによって特徴づけられる牧畜民の属人主義的な集団観は、利用できる局面もあるものの、基本的に脅威であり、排除されるべきものであった。同時代のトルコ共和国やブータン王国のケースから、歴史的文化的な背景や国内外の政治的力学によって、国家と牧畜民との関係が敏感に揺れ動き、牧畜民の属人主義的な集団観は表象の空間（エスニシティ）においても実体レベル（エコロジー）においても様々なインパクトをもたらしていることが了解される。国民国家のイデオロギー、経済合理主義的な立場から、遊牧民

の末裔と自称する国家においてさえ、牧畜民の周辺化が進んでいる。そうした中で、チベット高原・モンゴル国・東アフリカの民族誌を通して、牧畜民の集団観、延いては彼らの在地の共生論理のエッセンスに触れることが可能である。

なお、本特集の執筆者は全員「牧畜社会におけるエスニシティとエコロジーの相関」と題する研究会のメンバーである。本研究会は、2016年に熊本大学で発足したものであり、同年度に熊本大学文学部学術研究推進経費（代表者：シンジルト）を受け、そして、翌年度からは日本学術振興会より科学研究費補助金（基盤研究（B）、研究課題番号：17H04538、研究代表者：シンジルト）を受けてきた。本研究会は、これまで研究集会を計7回組織しており、その間、外部講師として、東アフリカ牧畜社会を研究する人類学者佐川徹氏（慶應義塾大学）、西南アジア牧畜社会を研究する人類学者松井健氏（東京大学名誉教授）、中央アジアの英雄叙事詩を研究する坂井弘紀氏（和光大学）にそれぞれの専門的な立場から講演をしていただき、研究会メンバーの研究発表に対するご批判もいただいた。また、アムド・チベット牧畜社会を研究する人類学者別所裕介氏（駒澤大学）にも研究発表会に出席していただき貴重なコメントやご批判をいただいた。本研究会の研究成果の一部となるこの特集が、少しでも上記諸氏のご批判にこたえたものになっていれば幸いである。

参考文献・引用文献

風間計博（2016）「現代世界における人類学的共生の探究――コスモポリタニズムと在地の実践論理」『文化人類学』81(3)：450−465 頁。

片岡樹（2014）「山地民から見た国家と権力――ラフの例から」ダニエルス、クリスチャン編『東南アジア大陸部：山地民の歴史と文化』言叢社、25−53 頁。

ギアーツ、クリフォード（1987）『文化の解釈学Ⅱ』吉田禎吾ほか訳、岩波書店。

コーエン、エイブナー（1976）『二次元的人間：複合社会における権力と象徴の人類学』山川偉也、辰巳浅嗣訳、法律文化社。

佐川徹（2009）「東アフリカ牧畜社会における横断的紐帯の持続」『アジア・アフリカ言語文化研究』78:131−163。

シンジルト（2017）「民族と国家――集団意識はどのように生まれるのか」梅屋潔、シンジルト編『新版 文化人類学のレッスン――フィールドからの出発』学陽書房、161−184 頁。

スコット、ジェームズ、C.（2013）『ゾミア：脱国家の世界史』佐藤仁監訳、みすず書房。

スコット、ジェームズ、C.（2019）『反穀物の人類史：国家誕生のディープヒストリー』立木勝訳、みすず書房。

ダニエルス、クリスチャン（2014a）「序論」ダニエルス、クリスチャン編『東南アジア大陸部：山地民の歴史と文化』言叢社、9−22 頁。

ダニエルス、クリスチャン（2014b）「雲南西南部タイ人政権における山地民の役割――一七九二年〜一八三六年ムン・コーンにおける国内紛争から読み取れる史像」ダニエルス、クリスチャン編『東南アジア大陸部：山地民の歴史と文化』言叢社、107−152 頁。

リーチ、エドモンド R.（1987）『高地ビルマの政治体系』関本照夫訳、弘文堂。

松井健（2011）『西南アジアの砂漠文化：生業のエートスから争乱の現在へ』人文書院。

Barth, F. (1969) Introduction. In F. Barth (ed.), *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Difference*. Prospect Heights, IL: Waveland Press, pp. 9-38.

Humphrey, Caroline (2015) Is Zomia a Useful Idea For Inner Asia? In *Mongolian Journal of Anthropology, Archaeology and Ethnology*, Vol. 8, №. 1 (403): 92-107, The Lattimore Lecture (2014), Ulaanbaatar, Mongolia.

Jonsson, Hjorleifur (2010) Above and Beyond: Zomia and the Ethnographic Challenge of/for Regional History. In *History and Anthropology* 21 (2): 191-212.

Leach, E. R. (1954) *Political Systems of Highland Burma: A Study of Kachin Social Structure*. London: G. Bell & Son Ltd.

Lieberman, Victor (2010) A Zone of Refuge in Southeast Asia? Reconceptualizing Interior Spaces. In *Journal of Global History* 5 (2):333-346.

■著者紹介

①**氏名**：シンジルト（Shinjilt）

②**所属・職名**：熊本大学大学院人文社会科学研究部・教授

③**生年と出身地**：1967年、内モンゴル自治区バーリン右旗。

④**専門分野・地域**：社会人類学・内陸アジア。

⑤**学歴**：西北民族大学歴史学部卒業（1989）、一橋大学大学院社会学研究科地域社会研究専攻修士課程（1995年）および博士課程（2002）修了。社会学博士（一橋大学、2002年）。

⑥**職歴**：内モンゴル社会科学院歴史研究所研究員、日本学術振興会外国人特別研究員（DCおよびPD）、一橋大学大学院社会学研究科助手等を経て、2006年熊本大学文学部助教授、2014年熊本大学文学部教授、2017年より現職。

⑦**現地滞在経験**：修士課程からアムド・チベットの牧畜地域でフィールドワークし、DC研究の一環として1999年から約1年間アムド・チベットで住み込み調査。PD研究をきっかけに2005年から天山・アルタイ山脈の牧畜地域でもフィールドワークを実施してきた。

⑧**研究手法**:牧畜民の家に居候させてもらい、雑談・インタビュー・参与観察などの方法で調査研究を行っている。

⑨**所属学会**：日本文化人類学会、生態人類学会。

⑩**研究上の画期**：2000年から始まった「西部大開発」プロジェクト。このプロジェクトは、中国西部、特にその牧畜地域の生業形態や伝統文化に大きな変化をもたらした。

⑪**推薦図書**：ジェームズ・C・スコット（2019）『反穀物の人類史：国家誕生のディープヒストリー』立木勝訳、みすず書房。